

アノのあのお



第3回
ソングノハイルハン区
訪問団来たる

サエンバエノ、アノンです。今年もあどわずかです。

今年は、コロナ禍が明けて、友好都市モンゴル国ソングノハイルハン区との交流が4年ぶりに復活した年でした。さらに、私が伊豆の国市の国際交流員に就任した記念すべき年です。モンゴルとの交



▲訪問団が市役所内を見学する様子

流は、8月に伊豆の国市から公式訪問団と中学生訪問団だけでなく、10月には、ソングノハイルハン区から区長以下9人の訪問団が伊豆の国市を訪れました。ソングノハイルハン区の訪問団一行は、山下市長を表敬訪問し、市役所内や市内スポーツ施設、長岡中学校、クリーンセンターいずなどを視察しました。

視察初日の歓迎会では、日本の伝統芸能『しゃぎり』が披露され、演奏体験をしました。また、市民と訪問団が輪になって『いずのくに音頭』を踊りました。翌日の昼間には、市内の団体である和布遊半と一緒に、モンゴルから持ってきたフェルトを使って赤ちゃんのお守りキット(モンゴル



▲しゃぎり演奏体験
私も体験させてもらいました

の伝統的なおまじない)作りを行いました。

滞在中、伊豆の国市の各所でもてなしを受け、視察や体験をしたソングノハイルハン区の訪問団は、「ごみ処理の取り組みは素晴らしい」「子どもの英語教育に力を入れていると感じた」「スポーツ施設づくりがスマートでソングノ区でも同じ施設を作りたい」などと感想を語りました。

今回の訪問団には30代・40代の若い職員が多くいました。これからのモンゴルを創り上げていく世代であり、今回の見学が、今後のモンゴルのために活かされていくことを期待しています。



▲和布遊半での制作体験

今回の訪問団の中には、ソングノハイルハン区の女性開発センター*長もいて、和布遊半での制作体験にとっても興味を持っていました。この交流を機に、モンゴルの素材を伊豆の国市が加工して商品化する…なんて夢が実現したら素敵ですね。それでは、バヤルタエ。

*女性の職業訓練を目的にフェルト、カシミア、革製品などを制作・販売する施設。8月に伊豆の国市公式訪問団が現地を視察しました。

☎ 協働まちづくり課
055(948)1412

第18回 山崎 伸二 さん

ミニトマト農家



自然や人に恵まれた就農のまち

ミニトマトのニューファーマー(新規就農者)として8年目を迎える山崎さん。農家になることを夢見て故郷の熊本を離れ、2016年に伊豆の国市へ移住しました。

「東京で農業フェスに参加したとき、伊豆の国市が最も農業の研修やサポートの体制が手厚かったことが、移住・就農の決め手でした」。

憧れの農家としてスタートを切った山崎さんでしたが、当初は苦勞の連続でした。「研修期間を終え、ようやく自分の第1作目という年に台風の被害に遭ったり、ミニトマトが病気や害虫の被害に遭ったりと、当

初の数年は収穫量が安定しませんでした」と振り返ります。その後、研究を重ね、病害虫のリスクを抑えるために、土耕栽培から養液栽培(土を使わず、培養液で作物を育てる栽培方法)に切り替え、収穫量が安定してきました。

山崎さんが次にこだわったのは新鮮さ。「ミニトマトは、そのまま生で食べるのが一番おいしい。皆さんに新鮮なミニトマトを味わっていただきたいので、収穫してすぐに出荷できる生産体制づくりにこだわっています」。

移住者の山崎さんから見た伊豆の国市は、「農業をするのに良いまち。自然だけでなく、人も良い。3年間の就農研修を共に過ごした仲間や先輩が多いのも心強いです」。

燃料や肥料の価格高騰など、農家を取り巻く状況は厳しく、苦難の日が続きます。「だけど、支えてくれる仲間がいる。どんな時も根気よくミニトマトを作り続け、安定した収穫と鮮度を追求したいです」。故郷から遠く離れたこのまちは、山崎さんが夢を叶える場所になりました。

☎ 障がい福祉課
0558-76-8007 FAX 0558-76-8029

ろう学校では、クリスマスの日、サンタさんに扮した先生からプレゼントをもらっていました。私は自宅から通学していましたが、遠方の人たちは、寮生活をしていたので、数ある行事の中でも楽しみの一つでした。

かんたん手話講座 ④ サンタクローズ

左手拳を左肩の前に置き(袋を担ぐ様子)、丸めた右手を顎から握りながらおろす(サンタのひげを表す)。

